

## メッセージアウトライン

### ルカ 1:26～45「救い主誕生の知らせ」

[26-27]御使いが祭司ザカリヤに告げたことばのとおり彼の妻エリサベツが妊娠してから六か月目になった。今度は同じ御使いガブリエルが神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。

「ナザレ」…イスラエルの北部のガリラヤ湖の西約 20 km程のところにあった小さな田舎町。彼女の名はマリヤ。ダビデの家系のヨセフという人のいいなづけであった。彼女はごく普通の目立たない女性であったと思われる。

[28-33]マリヤは御使いの「おめでとう…」とのことばにひどくとまどい恐れた。御使いはマリヤが神から恵みを受けたこと、みごもって、男の子を産むこと、その名をイエスと名づけること、その子はすぐれた者となり、いと高き方の子(神の子)と呼ばれ、神は彼にダビデの王位を与え、とこしえにヤコブの家(イスラエル)を治め、その国は終わることがないと伝えた。

[34-38]マリヤは、「どうして…私はまだ男の人を知りませんのに」と正直に御使いに尋ねた。すると御使いは、それは聖霊によるのであり、いと高き方の力が彼女をおおい、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれると答えた。また御使いは彼女の親戚のエリサベツが不妊の女といわれていたのに、今はもう六か月であるということも伝え、「神にとって不可能なことは一つもありません」と教えた。人間にとって不可能と思われるようなことでも、神にとって不可能なことは一つもないのである。それでマリヤは御使いのことばをすなおに受け入れ、「…どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように」と答えた。

[39-45]マリヤは御使いのことばを信じて、親類のエリサベツを訪問した。「山地にあるユダの町」…エルサレムの近く。ナザレからは山道を歩いて約 100 km程の距離。マリヤがエリサベツにあいさつをした時、彼女の胎内で子が喜びおどり、彼女は聖霊に満たされた。エリサベツは「…私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう」とマリヤを祝福した。そして彼女は、「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう」と言った。金持ちや、家柄のよい人や学歴のある人が幸いなのではなく、主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人が幸いなのである。